鉄鋼新聞

2014年8月20日 水曜日

競合ひしめくCC業界

優位性への挑戦！
村山鋼材の事業戦略

高品位シート品を拡販

厚物広幅領域拡大に注力

コイルセンター（CC）が、競合ひしめくマーケットで何を「強み」に独自の競争優位性を発揮していくか―。

熱延CC大手、村山鋼材（本社・千葉県浦安市入船）の村山和雄社長は、戦略課題のひとつに「より良い技術を確立して『高品質な製品』を提供すること」を掲げる。

村山社長

それに向けた具体策が、独自技術を生かしたオリジナルの高品位カットシート「レーザ切断用鋼板」の商品価値向上である。

16ミリ厚で幅2・3メートル

「レーザ切断用鋼板」は、母材コイルの規格・板厚・板幅・引張強さなどの特性に合わせて独自に設定した加工条件でレベラー剪断することでコイル内部の残留応力を開放（除去・均一化）。これによってレーザ切断時に曲がりや反りが発生せず、レーザ切断後の矯正・手直しが不要となるので、客先の加工コスト削減にも貢献する。

自社開発し、販売開始してからすでに10年以上が経過。この間、同社では技術面で厚物対応力と広幅対応力の拡大にチャレンジしつつ、営業面では積極的に拡販・PRし、認知度を高めてきた。

2年前に、厚物広幅長尺用レベラー・シャーライン「ジャンボ・カッティングライン1号（JCL1）」を東京工場から現在の浦安工場（浦安第2鉄鋼団地内）に全面移設した際、ファイナルレベラー（仕上げ矯正装置）を一新。これによって板厚の適応範囲をSS400規格材で最大16ミリ厚（幅は1850ミリ）に引き上げた。

そしてこのほど、S16ミリ厚×幅2・3メートルコイルの残留応力開放に関するレベリングテストを実施。「表面性状や平坦度も含め、厚板ミル材と見劣りしない鋼板（コイルカットシート）に仕上がりつつある」（同社厚板営業部）と結果も上々だ。

「商品化」に手応え

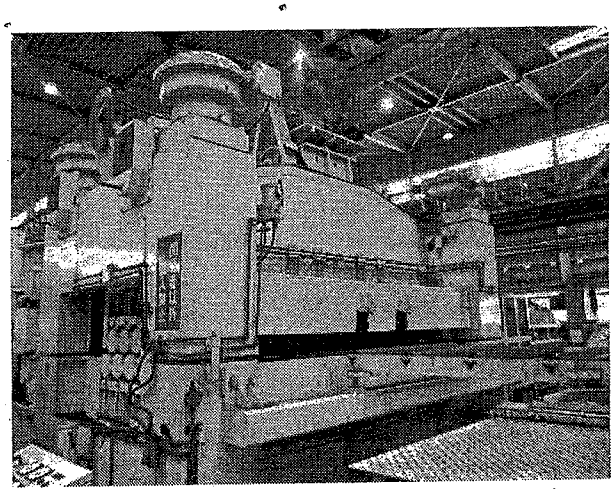
このカットシート品は、地場の厚板溶断業がプラズマ切断機を使って建材分野向け切板製品として実際に加工販売したが「特に問題なし」との高評価を得たとのこと。

まだ、1コイルを延ばしただけなので「板厚16ミリでも幅2メートルを超える広幅コイルを『レーザ切断用鋼板』として商品化したと公言できる段階ではない」（同）と慎重だ。

それでも今回のテスト結果を受け、新日本製鉄（現新日鉄住金）出身で「レーザ切断用鋼板」の〝生みの親〟である技術サービス部の下山修身部長も「7合目まで登ってきた」とし、自信と手応えをつかんだようだ。

コイルカットシートは、長手方向の自由度が高く、歩留り向上に寄与。即納ニーズにも対応する。さらには表面スケールが薄く美麗で、塗装を施す場合、ショットブラスト工程を簡略できるほか、塗装仕上がりの美観性（光沢）にも優れ、建機・産機やトラック、特装車輌といった表面仕上がりにとりわけシビアなユーザーからも好評だ。

加えて、厚物の広幅領域拡大のめどが立ったことで、これら需要分野における厚板ミル材の代替品としての商機が一段と拓けた。言い換えれば、他社との差異化に向けた「商品価値向上」への挑戦が実りつつある。



ロール交換したリリーフレベラー（JCL1）

その確証を高めるために、今後も広幅材の加工チャンスを的確につかんでいくとともに、品質維持・向上のためにJCL1とJCL2の両ラインのレベラーロールも交換した。

協業・藤澤鋼板との「総合力」増す

同社は、同じ独立系熱延CCの藤澤鋼板（社長・藤澤鐵雄氏）と、板厚に応じて保有設備を相互に活用しあう協業パートナーシップを組んでいる。

その中身は、板厚6ミリまでを藤澤鋼板に加工集約し、それ以上の厚物は村山鋼材に集中するスキームだ。

藤澤鋼板では先般、自社保有の「鐵腕レベラー（T－1）」を部分改良し、品質精度と生産効率の向上を実現。今回の村山鋼材の取り組みが実用化すれば、薄物から厚物広幅までの総合的な製品対応力が増す。CS（顧客満足度）向上につながり、ひいては村山、藤澤の両社にメリットをもたらすことにもなる。「協業の実」を高めるためにも、広幅対応力強化ミッションの早期達成が求められる。（太田 一郎）